季節の鉄道ものがたり

赤い電車

青木さやか

25歳で上京するまでは実家暮らしをしていた。最寄駅は名鉄瀬戸線の尾張旭駅。歩いて30分かかっていたので、今考えると最寄り駅と呼ぶには遠い気もするが、当時はその距離に疑問一つ持たず駅まで歩いた。

中学高校時代、友人と駅までの行き帰り、話しながら歩くことが好きだった。そんな時は大体、「好きな男子」の話をしていた。恋する相手が友人と被らない限りは、どれだけだって話せたし、いつまでだって聞けた。最高に楽しいお喋りの時間だった。

家から駅に向かう道は贅沢な景色が広がっていた。玄関を出て緩やかな坂を下ると、綺麗に整備された長池（ながいけ）と呼ばれる池があり、中央に橋が架かっていた。時折釣り人が糸を垂らしていたがいつだって釣り人とは距離をとって歩いた。

わたしにはトラウマがある。幼少期、長池で父の釣りに付き合った時「よし釣るぞ！」と父が竿を振った瞬間、釣り針がわたしの唇に引っかかり取れなくなるという事件があった。わたしは、魚さながらに上を向きあぁあぁと苦しがったが、「さやかが釣れた！」という父の不用意な発言に、周りが焦りながらも笑いがおき、釣り針を咥（くわ）えたまま病院に運ばれた。それ以来、「素人釣り人注意」という看板を頭の中で立てながら歩くのが日課になった。

池の脇の小道に入ると両側に木が植っていて、沢山の葉っぱ達は日差しを和らげ雨避けになってくれた。葉っぱが風に揺れサワサワと音を立てた。時には蛇が、時には痴漢が出ると噂の小道だったが、ヘンゼルとグレーテルのお話の小道を思わせるその通りが、わたしは大好きだった。

そこを抜けると、なんとお城があった。旭城というその城は、瀬戸線の中からもよく見えた。隣町の友人から「あの城って本物？」と聞かれた。本物と偽物の違いはよく分からないが、歴史的建造物ではないので、わたしはいつも「あれは偽物、歴史浅すぎ！」と悪ぶって笑った。

城の横には照明付きの立派な野球場があった。休みの日には、カキーンと

イラスト・岡林玲

みんてつ

CONTENTS
Vol. 80
2023

◎日本民営鉄道協会とは？
1967年に社団法人として設立、2012年4月1日付で一般社団法人に移行、72社の民営鉄道会社で組織されています。
輸送力の増強と安全輸送の確保を促進し、鉄道事業の健全な発達を図り、もって国民経済の発展に寄与することを目的とした活動を行っております。
なお、JR各社や公営地下鉄などは加入しておりません。

季節の鉄道ものがたり 02
◉赤い電車
タレント・エッセイスト・女優　青木さやか

基調報告61 04
都市と鉄道――
関西から考える
◉神戸大学 経営学研究科 名誉教授　正司健一

特集／深める沿線、拡げるフィールド
［長期ビジョンで次世代のまちづくりを推進する阪急電鉄の取り組み］

TOP INTERVIEW 08
地域とともに、
変化する事業環境を
乗り越える
◉阪急電鉄株式会社 代表取締役社長　嶋田泰夫

REPORT I 12
阪急電鉄における
沿線価値の向上への取り組み
◉専務取締役 都市交通事業本部長　上村正美

REPORT II 18
「大阪梅田エリア」
国際交流拠点への展望
◉都市交通事業本部 沿線まちづくり推進部長　高岸実良

Mintetsu Report 22
阿佐海岸鉄道
鉄道とバスの二刀流で挑む
地域活性化への取り組み
◉阿佐海岸鉄道株式会社 代表取締役専務　大谷尚義

みんてつインフォメーション 26
日本民営鉄道協会 新会長就任

みんてつ臨時COLUMN 27
台風で被災した大井川鐵道の現状報告
◉大井川鐵道株式会社 広報室　山本豊福

連載44 地方民鉄紀行 28
津軽鉄道株式会社

連載11 民営鉄道の起源を訪ねて―鉄路は何を目指したか 30
神奈川県　江ノ島電鉄
◉日本宗教史研究家　渋谷申博

※本号の取材に応じてくださった方々の社名・肩書きは取材時（2023年7・8月）のものです。

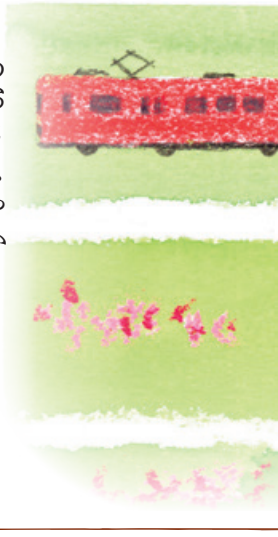
いうバットの音や、グローブにおさまるボールの音、まわれまわれという掛け声や、拍手が耳に届いた。

「さやちゃん？ あんた、大きくなったねえ」と応援中の首に白いタオルをかけた中年女性に声をかけられ、「あ、はい、どうも」とスカしながら答えた。「あっという間に背が抜かされたわ、あんた、大きくなったねえ」と、まさかのリピート発言に「あ、はい、どうも」と、わたしもリピートしながら早足で通り越して「あのおばさん、同じ事2回言ってるけど」とスカして笑い、直ぐに恋話に戻った。

恋話は、2回どころか永久リピート再生中だった。

公園を過ぎると、見渡す限り田んぼが広がっていた。カエルや鈴虫。いつも何かの虫の音が聞こえた。田んぼの向こう側には線路があって、赤い瀬戸線が四両で走っていくのが見えた。わたし達は、田んぼの道をあみだくじのように昨日とは違うルートで歩いた。

駅に着き、わたし達は切符を買って伝言板の前に行き、チョークで相合傘を書き、自分の名前、横には「好きな男子」の名前を書き込んで、きゃー！と言いながら消しては、また書いた。電車が来るまで、わたし達は何度だってリピートした。



あおき さやか

タレント・エッセイスト・女優。愛知県出身。フリーアナウンサーとして名古屋を中心に活動後、芸人に転身。自叙伝的エッセイ『母』が好評となる。近刊に『母が嫌いだったわたしが母になった』、『厄介なオンナ』、『50歳。はじまりの音しか聞こえない』。「おかしな二人」など舞台出演多数。